

まだ明確に確立されていないと考えられるからである。技術者は水理計算と構造物の予備設計をもって設計に接近し、そのあと障害のないことを確認しながら最終設計を完了させることができる。

以上述べたところは、とりもなおさず用地取得問題における主要な相違点にもつながるものである。連邦政府で事業計画が考慮されると、まず公聴会が開かれて、その席上ですべての異議が検討し考慮される。そして一たん事業計画が承認されて設計が開始されると、必要な土地はどこでも獲得される。用地取得にわざわざされて、スケジュールが遅延したり設計が変更されたりするようなことはないのである。

さらにまた用地買収にあたって、交渉によって合理的な価格で買収できない場合は、政府がこれを「収用」する。収用されると、直ちに建設工事が開始されるよう、所有者に対し強制的に土地放棄が命令される。そのあと裁判所が決定した適正代価が土地所有者に支払われるのである。この代価は通常適正なものであって、決して不当な高値ではない。

農地の種類、所有面積および開発の集約度には、両国の

間に大差があることはもちろんであるが、半ば乾燥したアメリカ西部地方における個人の所有面積は平均 300ヘクタール(約 300町歩)以上である。であるから、アメリカで交渉の相手が1人ですむ用地問題も、日本では300人の所有者を相手にしなければならないであろう。そしてこのことは同時に、300戸の農民の移住を意味し、300件の問題の発生を意味するのである。その問題解決の困難さ複雑さは想像に余りがある。私たちからみると日本の技術者は、技術的問題に心労する何倍かの精力を、用地問題に傾注して、しかもなお足りないように見える。そしてこの避けようのない現実には、愛知用水計画に協力しつつあるわれわれアメリカの技術者たちにも、目を追うて深刻かつ切実な関心をよびさましていかに苦しむを得なかったのである。

× × × × × ×

以上の一文の目的は、日本のかんがい事業計画におけるある種の条件、そしてこれと全く対照的なアメリカにおけるそれをおきならべてみることにあった。何らかの参考になれば幸いであると思う。

(1958. 8. 15. R. E. ルーベンス)

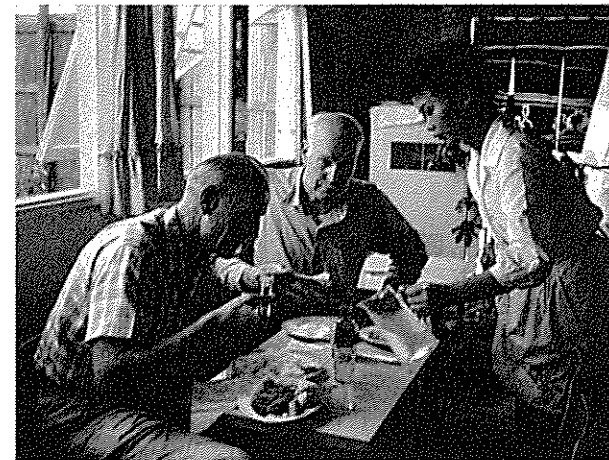
彼らがその籍をおく工務部技術援助課の一部、机の並べ方がいわゆる「人事院式」でみんな前向きになっている。彼らのデスクはその体にふさわしくさぶるデカイ



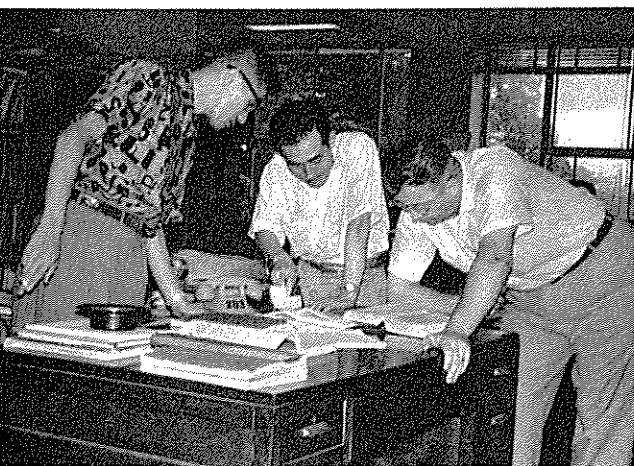
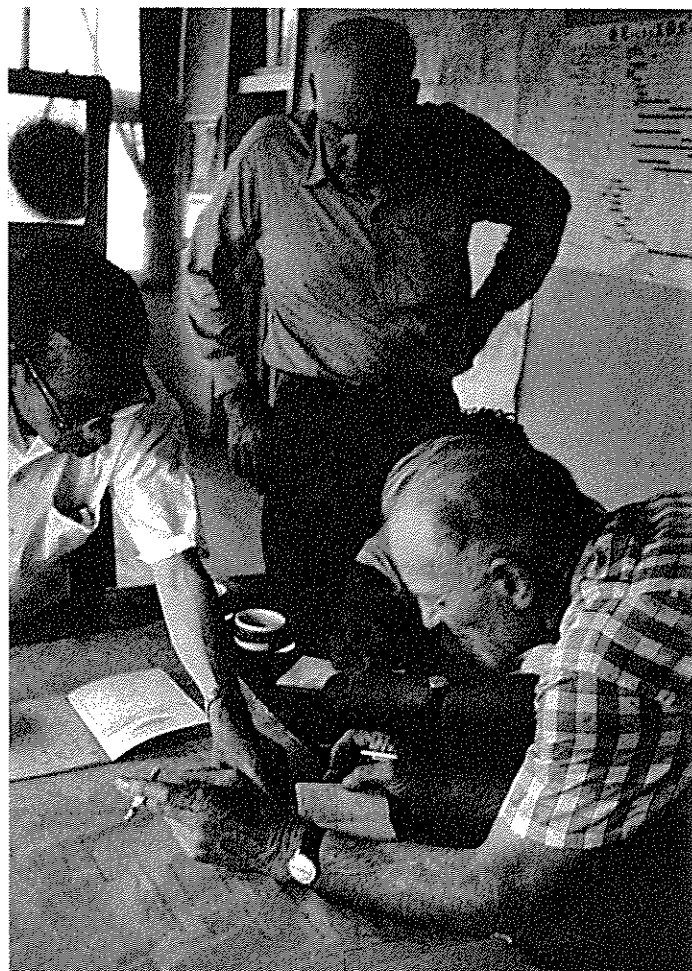
老令のチーフ・エンジニアが現場で労務者に交って、汗ミドロで働いている。これも日本の技術者からみると異様な風景であろう。コンクリート面の仕上げにコテをにぎると、「一ナゼ1000円」と労務者たちが目を丸くする



いつまでも故国の習慣を捨て切れない日本人とちがって彼らは日本における日本的な生活に同化しようと意識的に努力しているようだ。工事現場の町の食堂でもフォークをわざわざ箸にかえてもらい、そして茶外器用に使いこなして得意である



日本でいえば課長クラスのチーフ・エンジニアが、みづから図面のチェックをする。「自分の手がけた仕事はその最後を見届ける」という彼らにとっては当然の心構えなのであろうが、反面精力と時間のロスもまぬがれないようである



会話はほとんど通訳を介するが、技術的問題だけに言葉の上の不自由はさほどでもない。彼らも1年たてばカタコトをしゃべりご愛嬌である

図面の美しさは無類、もって範とするに足る。上方に平面図、下方に縦断図が書かれ、計画線が決定するまでは青写真で間に合わせる。原図の分類整理も実に厳格だ

